
同僚が不良に絡まれた。

イズナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同僚が不良に絡まれた。

【Nコード】

N0936K

【作者名】

イズナ

【あらすじ】

面白かったので、某掲示板に書いてあった出来事を僕流に書き直させてもらいました。

同僚が不良に絡まれた。

俺は今日、同僚の奴と二人で飲みに行く約束をしている、そういう事で俺は駅前で待っていた。

…しかし遅い、遅すぎる！約束の時間は午後の6時と言ったはずなのに、今は6時30分だ、俺をこんなにも待たすとは何事だ、怒りを通り越して何故か心配になってきた、事故にでも遭ったのだろうか？いやいやいや、縁起でもないな…人間の悪い癖だ、悪い方へと考えてしまう。

きつとやつは道端にいる猫とでも戯れているのだろう、猫好きだし、そんな事を考えていると…

ポーニヨ ♪ ポーニヨ ♪ ポーニヨ … パカッ

俺は携帯を開いた…メールだ、おっと、今は気にしないでくれ、差出人は奴こと同僚の吉田だ、内容は…

「遅いよ、まだ？」

という具合の感じだった、何がた？俺は指定した約束の駅前に居る、という事は吉田が間違った場所に居るのだろう。

俺は、何処に居る？というメールを送り返した、あ、絵文字付けるの忘れてた、まあいいか、吉田も付けてなかったし。

一分後、吉田から返信がきた。

「何処って、北側の駅前だけど」

俺は南側の駅前と言ったはず、とりあえず吉田に電話することにした。

ブルルルル…

「ハイもしもし」

「吉田、俺は南側の駅前にいるんだけど」

「ええ！？北側って言ったじゃないか！」

俺は確かに、南側と言ったが吉田は気は弱いが何故か頑固者だ、このまま言い争っても無駄と思い俺はポツキーの如くこちらが折れる事にした。

「そうか、俺の思い違いだったよ、すまん」

「気にしないでいいよ、誰にだって聞き違いはあるしね」

吉田は俺に優しく言ってくれたんだが、俺はなんともいえない苛立ちを覚えた。

俺は携帯を切り、吉田の待っている北側の駅前に行った。

吉田「こっち、こっちー！」

人混みの中、契れんばかりに手をブンブンと振ってやがる、止めてくれ恥ずかしいじゃない。

俺「さて、何処に行こうか？」

吉田「最近、近くに新しい居酒屋さんが出来たからそこにいこうよ」

俺「よし、じゃあそこに行こうか」

行き先も決まったところで、行こうとしたが不意に尿意が俺を襲ってきた。

俺「スマン、ちょっとトイレに行ってくるよ」

吉田「うん、此処で待ってるから」

吉田に駅前のコンビニに待ってもらい俺はトイレに行った。

じよろろろ

俺「ふう……」

俺はさっさと小便を済ませ、吉田の待っているコンビニへ向かった。

途中、チャックが開いていた事は一生の不覚だった。

ちゃりーん♪ちゃりーん♪

ん？今、自転車のベルの音が聞こえたような…それもコンビニの方から。

俺は人混みの中、耳をすました。

ちゃりーん♪ちゃりーん♪

やっぱりコンビニの方からだ、ベルの音の他にも男性の怒鳴り声が聞こえた。俺こんなに耳が良かったっけ？と思いながら何故か物影に隠れながらコンビニに向かった。

そしてコンビニの近くの銅像から様子を伺うと…

電車賃、貸してくれねーかな？

なんと、俺の同僚が不良に絡まれていた。

不幸な吉田くん

まあ要約すると、「俺達は電車に乗りたいたから金をくれ」だ、君達自転車に乗ってるじゃない。

しかも、不良は吉田の周りをグルグルグル自転車で回っている、何かの儀式か？

しかもしかも、不良は一人ではなく四人だ、まあ吉田は公務員だし、見たところ不良は高校生で公務員は高校生より強いと相場が決まっているものだ、もし危なくなれば高校生時代に陸上部に入っていた自慢の足が火を噴くだろう。

不良A「おい、跳んでみるよ」

不良の一人が吉田に言うなり、吉田はピョンピョン跳びはじめた、プライドが無いのか君は…

ポトツ

吉田「あっ」

吉田のスーツの中から、財布が落ちた。

どういいうれかたをしたんだお前は。

不良B「おお！」

不良C「財布じゃねえか！中身は…十万も入ってやがるぜ！」

不良達は財布を見るなり狂喜乱舞状態になっている、嬉しすぎるのか自転車を漕ぐのを忘れている。

キラーン！

これはチャンスと、吉田の目が光った！…光ってるように俺には見えた、吉田は弾かれた様に自転車の間を走り抜けた…と思った矢先の事だった。

ガシャ！！

奴は勢いよく自転車に足をぶつけてしまった。

吉田「痛った〜！！」

よほど痛かったのか、地面をゴロゴロ転がっている、しかも自転車へのダメージもかなりのもので、見事にカスタマイズされた自転車のライトの部分が強打により割れ、カゴも見事にへっこんでいた。

不良A「あああー！！？俺のチャリが！？どうしてくれんだよ！！」

不良Aは吉田の胸倉を掴み、上下左右にブンブンと振りまわした。

ポトツ

吉田&不良達「あ」

今度は給料袋が落ちた、そのスーツ穴開いてるんじゃないか？

吉田「あつ、それは！」

さすがに給料袋は駄目と思ったのか、落ちた給料袋を急いで拾おうとしたが、不良達はそれを許さなかった、しかし今時給料袋っておかしくないか？

不良A「これは頂くぜ！」

吉田「だ…駄目だよ！とりあえず話し合おうよ…ね？」

ね？じゃないだろ、不良相手に話し合いなんてお笑いも良いところだ。

不良A「そんなもんするわけ無いだろうが！！」

そろそろマズく成ってきたので、俺は仲裁に入りに入った。

俺「ちょっと待っててくれないか？」

今の俺に怖いという感情は不思議と無かった、ただ吉田を助けたい思いでいっぱいだった、ホントに。

不良B「誰だよ、お前は！」

俺「そいつの身内だ」

不良C「その身内が何しに来たんだよ!？」

俺「財布と給料袋を返して貰いに来た」

不良A「ああ!？ふざけんな！」

不良Aは雄叫びと共に俺に殴りかかってきた、上等だ!来るならこい!

緑

俺は身構えた、不良Aのパンチは俺の顔面をとらえようとしたが…

「田淵！やめとけ！」

不良の中の一人が不良Aに叫んだ、そして不良Aはパンチを俺の顔面スレスレで止めた。

チツ、俺のクロスカウンターが炸裂する瞬間だったのに…嘘です。

ちなみに不良Aは「田淵くん」と判明した。

田淵「何で止めたんだよ！」

田淵くんは些か不機嫌だ、いや、怒ってるのか。

不良D「お前が今、その人を殴ったところでどうなる？」

田淵「…わかったよ」

田淵くんは渋々俺から離れた、田淵くんを制止したのは緑のダウンを着た不良Dだった。

ありがとう、本当は殴り倒されてるところだったよ、不良Dは名前が解らないので「緑くん」と呼ぶことにした。

俺「ありがとう、助かったよ」

緑くん「当然の事をしたまでっすよ、それより連れの人が…」

吉田はまた隙をついて、逃げようとしたが…

ガシャ！！！！

また自転車に足をぶつけやがった、それも緑くんの自転車に。
もうお前は天に召されてしまえ、そして帰ってくるな。

吉田「おゝおゝゝ！！」

今度は悶絶してる。

俺「あ…あの…」

緑くん「別に気にしないでいいっすよ、田淵みたいに大破してない
っすから」

俺「済まない…」

もう吉田の事はどうでもよくなってきた、緑くんとなら良い酒が飲
めそうな気がしてきた。

俺は吉田の元に行き、ゲンコツをお見舞いした。

吉田「いったゝ何するんだよ！」

俺「頼むから、これ以上厄介事を増やすな！」

吉田「解ったよ」

恐らく解っていないと思うが、まあいいだろう。

緑くんがこのままでは收拾がつかないと判断し、一旦話し合う事になった。

まさか本当に不良達と話し合うとは驚きだ。

俺「この事態の元を辿ったら君達が悪い、そうだろう？」

田淵&不良BC「んだと!？」

緑くん「待て、続きを聞け」

俺「しかしっ!!」

俺は大声で言った。

俺「吉田が君の自転車を潰したのも悪い」

田淵くんを指差しながら言った。

吉田「そーだ そーだ」

君は黙ってなさい。

緑くん「確かに俺達が悪いけど、別として自転車を壊した吉田さんも悪いっすね」

俺「そこで、吉田に自転車を弁償をさせて、この件は無かった事に…ということはどうだろう?。」

緑くん「田淵、これでいいだろ?。」

田淵くん「仕方ねえな!。」

吉田は些か不満げだが関係ない関係ない。

緑くん「話はまとまったな、俺コンビニ行ってくるわ」

不良BC「俺らも行くぜ」

緑くん「俺さんも一緒にどうっすか?お詫びにオゴリたいっすから」

俺「一緒にいくけど、自分で買っよ」

緑くん「そうっすか?じゃあ行きましようか」

俺達は、吉田と田淵くんを残してコンビニに行った、緑くん曰く二人きりの方が話易いとか。
なんか違うと思うが。

事件解決

俺はコンビニでプリンを買った、ただのプリンじゃないクリームが乗ったプリンだ。
どうでもいいか。

何故か緑くんが俺にHな本を買ってくれた事は吉田に黙っていよう。

俺「吉田、首尾はどうだ？」

吉田「もう終るよ、後はサインするだけだから」

サイン？

吉田は「見積書」と汚く書かれた紙を手を持っていた。
俺はソレを吉田から取り上げた。

吉田「なにをするのさ！！」

俺「俺も見させてくれ」

なになに…

ライト代 6000円

カゴ代 7500円

塗装代 5500円

クリーニング代 8000円

どこのぼったくりバーだよ。ライト代とカゴ代を請求するのは解るが、塗装代とクリーニング代って何なんだ？

その前に請求金額がおかしい、自転車を買った方がよっぽど安上がりだ。

俺「吉田、お前騙されてるぞ」

吉田「今時の自転車って高いんじゃないの？」

緑くん「吉田さん、そんな事無いっすよ、どれ、俺にも見せて下さい」

吉田から見せて貰った見積書もどきを見て、緑くんは田淵くんを睨んだ。

緑くん「田淵、吉田さんを騙すなよ」

田淵くん「へいへい」

緑くん「まったく…もう一度話し合いをしましょう」

吉田は近い将来必ず詐欺にあうと思う。

俺「さっき思ってたんだが、別に自転車の個々のパーツを弁償しなくても、自転車を買えばいいと思うんだが」

緑くん「俺もそう思います、吉田さんと田淵は？」

吉田「僕は別に良いよ」

田淵「仕方ねえな」

何故君は毎度そんなに上から目線なんだ。

不良B「で、どこに行くんだ？」

俺「近くのホームセンターは？」

緑くん「俺さん、俺の行きつけのチャリ屋があるんですけど、どうですか？」

俺「俺はいいが、吉田、お前はどうか？」

吉田「仕方ないなー」

いつからそんなに偉くなったんだ君は。
元凶の癖に。

不良C「あー、あそこか、田淵お前はどうかやって行くんだ？」

さっき気付いたんだが、吉田のバカが田淵くんの自転車を倒したせいで、何故かタイヤがパンクしていた。

緑くんのは無事だったが。

緑くん「田淵、お前は俺のチャリに乗って行ってくれ、俺は俺さんと吉田さんで歩いて行くから」

田淵くん「緑、悪いな、先に行ってるぜ！」

田淵くんは不良BCを引き連れて自転車屋に向かった。

俺「いいのか？」

緑くん「いいっすよ、喋りながら歩くのも楽しいっすから」

なんて出来た人間なんだ、どこぞのバカも見習って欲しいものだ。

吉田「早く行こうよ！」

緑くん「解りました、行きましょうか」

俺達も自転車屋に向かった。

途中で自販機があつたので緑くんに奢ってあげた、かなり遠慮していたが。

吉田が恨めしい顔でこちらをチラチラ見てきたのでコイツにも奢ってやった。

俺としたことが…

緑くん「こっすよ」

緑くん行きつけの自転車屋は個人経営の店で人気ひとけの無い場所にあつた。

俺「こんな人気の無い所で経営してて大丈夫なのか？」

緑くん「大丈夫ですよ、この店はオーダーメイド専門の店ですから」

俺「納得」

吉田「あれ？不良達がまだ来てないよ？」

そう言われれば、田淵くん達はまだ来ていない。

事故にでも遭ったのかのか？

いや、どちらかと言えば起こす方か。

どちらにせよ心配極まりない事だ。

田淵くん「おーーい！」

吉田「あ、来た！」

来たのはいいが、田淵くんが自転車を降りて押している。

緑くん「田淵、どうした？事故にでも遭ったか？」

田淵「ちげーよ、乗ってたらタイヤがパンクしたんだよ」

恐らく吉田が倒した時に与えたダメージのせいだろう。

緑くん「ここで直して貰うか」

吉田「誰か店から来るよ!」

外が騒がしいので店員が様子を見に来たのだろう。

「店の前で騒がないでくれ……ん? 緑くんじゃないか!」

緑くん「店長、お久しぶりっすね」

店長「こんな大人数で店に来て、どうしたんだい?」

緑くん「それが…」

緑くんは自転車屋の店長に今までのいきさつを話した。

店長「なるほど、そういう事なら特別に自転車を売ってあげよう!」

緑くん「ありがとうございます」

緑くんが話をつけてくれたので俺達は自転車を見て回る事にした。
しかし、この店長、口調は穏やかなのだが見てくれが田淵くん以上に厳しい。

自転車を売るといふより壊してそんなイメージが浮かんだ。
先入観を持つてはダメだな、失礼だし。

田淵くん「おお!!」

不良B「どうした田淵!？」

田淵くん「これカッコ良くな!？」

田淵くんが興奮しながら一つの自転車を指差しながら言った。
鼻息が荒い…

不良C「おお!すげえ!」

店長「君、自転車を見る目あるね、乗ってみるか!？」

田淵くん「いいんすか!？」

店長「良いとも、外で乗るといいよ」

そう言うと、田淵くんの自転車以上にカスタマイズされた自転車を
外に運んで行った。

田淵くん「お前ら行くぞ!」

不良BC「おう!」

三人は意気揚々と店長について行った。

緑くん「あいつらはああいうのが好きなんすよ」

俺「そうなのか…ん？吉田は？」

緑くん「外で猫と遊んでましたよ」

猫に喰われてしまえ。

緑くん「俺さんは今からどうします？」

俺「せっかく来たんだし見て回るよ」

緑くん「それがいいっすね、俺は田淵の様子を見てきますから」

緑くんは田淵くんらの居る店の外に出ていった。

それから、残った俺は店に置いてある自転車を見ることにした。

俺「どれも高いんだな…全部十万円代か…」

さすがオーダーメイドだ、競輪選手が乗っていきそうな自転車だらけで、とてもじゃないが手がでない代物だ。

田淵くん「うぉー！マジ最高おお！！」

チラツと外を見ると、田淵くんが狂った様にあの自転車を乗り回していた。

俺も少し興味があるから見に行こうか。

緑くん「俺さん、どうしたんすか？」

俺「あの自転車を見に來ただけだよ」

緑くん「そうっすか、俺さん、もうそろそろ自転車を選ばないと…閉店に近い時間ですし」

緑くんに言われて携帯を見ると、もう8時30分じゃない。
たしかにもうそろそろ本腰を入れて自転車を選ばないとまずい。
しかし、先程自転車を見た限りではかなり高かったんだが…。

俺「選ぶのは良いんだが、高かったぞ？」

緑くん「大丈夫っすよ、俺がいれば店長が安くしてくれますから」

俺「それは良かったよ」

吉田「可愛いんだニャ」猫は」

ナデナデ

猫「ニャーン」

野良猫「ニャオー！」

猫「!？」

吉田「猫ちゃん、どこ行くだニャー！」

不良C「おい！田淵おお！代わりやがれ！
田淵くん「あと百周したらな！」

俺と緑くんが見たものは地獄絵図だった。

吉田と田淵くんは痛さでそこら辺を走り回り、店長は無残に壊れた自転車を見て 固まっていた。
とりあえず吉田の安否を確かめにいった。

俺「吉田！大丈夫か！？」

吉田「大丈夫じゃ無いニャー」

俺「ニャー？頭打ったのか？」

吉田「猫と遊んでたら猫語を喋る癖があるんだよ」

何が猫語だ、語尾に「ニャ」を付けただけじゃないか。
そんなに猫が好きなら猫の国に行くがいい。
そして帰ってくるな。

俺「とりあえず大丈夫なんだな！？」

吉田「だから、大丈夫じゃ…」

俺「大丈夫なんだな！！！？」

吉田「大丈夫です…」

吉田には悪いが今は大丈夫ということにした。

だって、吉田の事だ今度は逆に田淵さんに慰謝料とかを要求しかないからな。

そうなる为本当に収拾がつかなくなってくるからだ。

俺「まあそこで、休んでくれ」

吉田「どこ行くの？」

俺「彼の安否も確かめに行ってくる」

そう言つと俺は田淵くんのもとに急いだ。

不良B「田淵！大丈夫か！？」

不良C「田淵！大丈夫なのか！？」

田淵くん「お前ら！二人して似たこと言っんじゃねえええええ！！！」

緑くん「田淵、救急箱持つて来たぞ」

田淵くん「足痛てえんだから、優しくしてくれよ!」

緑くん「怪我人が文句を言うな、じっとしてろよ消毒液かけてやるから」

プシュ

田淵くん「ぎゃあああああゝ!!!!」

緑くん「大袈裟だなあ」

俺「どうした!？」

緑くん「消毒液が痛いらしくて叫んでるんすよ、それより吉田さんは大丈夫なんですか？」

俺「あいつは猫の毛玉でも食わせとけば大丈夫だよ」

緑くん「そうっすか？」

緑くんと話していたら、店長がこちらにやって来た。
嗚呼、今日が命日か。

店長「緑くん!!!!」

緑くん「店長!すみません!」

緑くんは店長に頭を下げた。

緑くんだけに頭を下げさせる訳にはいかない、俺も頭を下げた。

俺「すみませんでした!」

俺と緑くんが謝ると店長は笑い出した。
気が狂ったか!?

店長「二人とも顔を上げておくれ」

俺&緑くん「?」

店長「謝る必要は無いよ、あれは事故だからしょうがないよ、それよりあの二人は大丈夫なのかい?」

俺&緑くん「全く大丈夫です」

なんて出来た人間なんだ、緑くんといい店長といい、あのバカと田淵くんの心配をしてくれるなんて。
俺もこんな人間でありたいものだ。

店長「それは良かったよ!」

俺「あの自転車は俺と吉田で買い取らせて貰います」

緑くん「俺さん！？田淵も周りを見てなかったし、俺も払います！」

俺「いいんだ、ちょうど欲しかったしさ」

緑「…でも！」

それから吉田と田淵くんを呼んで話し合った結果、俺と吉田で買い取らせて貰う事にした。

緑くんは終始「俺が払います！」と言ってくれ、田淵くんは余程嬉しかったのかニヤニヤニヤニヤしていた。

壊れた自転車は店長が直してくれ、さらに店長の優しさにより、定価20万のところを10万にしてくれた。

田淵くん「いやっほおおおお！！！」

俺「嬉しそうだな」

緑くん「そうっすね、俺さん、ありがとっござます」

俺「ハハッ、君がお礼を言わなくてもいいよ」

吉田「あいつがお礼を言うべきだよ！」

俺「お前は黙ってなさい」

いきなり田淵くんがこっちに自転車に乗りながら向かってきた。

緑くん「どうした？田淵」

田淵くん「礼ぐらい言わねーとな、おっさん、あんがとよ！」

早口でそう言うのと早々と不良達の所に戻った。

ほお、君の口からそんな言葉が出るとは思わなんだ。

吉田も些か驚いていた。

緑くん「へえ…アイツの口からお礼の言葉が出るなんて…」

俺「よっぽど嬉しいんだろうな」

不良C「おーい！緑い！帰るぞ！」

緑くん「そろそろお別れっすかね」

俺「そうみたいだな、また会えたら一緒に酒でも飲みに行こうか」

緑くん「ええ、喜んで行きますよ」

田淵くん「早くしろおおおおお！……！」

静かにしてくれよ。

緑くんと話してるんだから。

俺「じゃあ、またな！」

緑くん「はい、さようなら！」

緑くんは田淵くんらと帰っていった。

さあて、俺らも帰るか！

吉田「僕は左に曲がるから、また明日！」

俺「ああ、また明日な」

俺と吉田もそれぞれの家に帰った。

この事件から一週間後、道端でバツタリ緑くと会い、本当に一緒に飲みに行った。

俺は吉田を緑くんは田淵くんと不良BCを連れて。

日本は実に狭い。

俺らは事件前に行くはずだった居酒屋に行き、皆でワイワイしながら楽しんだ。

本当に楽しかった。

俺はこの出来事を忘れる事は無いだろう。

完

事件解決（後書き）

最後までお読み頂いてありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0936k/>

同僚が不良に絡まれた。

2010年10月15日17時23分発行